

# LOVE

## メイヨー・クリニック・メソジスト・ホスピタルでの30日間(その2)

田中 美智子

### 最後の診察:もう病人ではありません

4月も半ばを過ぎたとはいえ、大雪の降った翌日の20日が、ドクター・ペインの最後の診察となりました。先生は、「今日であなたに対するメイヨーの治療は終わりました。もう病人ではありません。ですから薬も出しません。緊急の場合には、夜でも電話していただいかまいませんが、下痢や便秘、消化不良といったことでは駄目です。あとは自分で自分の状態をしっかりと観察しながら、健康管理していくこと。あなたがこれから立派にやっていけるということは、この30日間の入院生活で証明されています。もう明日日本へ一人で帰っても大丈夫です」と、穏やかにおっしゃるのでした。正直言って「薬も出しません」と言われた時は慌てました。この下痢の連続はどうなるのだ……と不安でした。しかし後になってみますと、ひたすら薬に頼るのではなく、自分で自分の健康管理ができたことは、その後“自立して生きる”糧になりました。また、リンパにガン細胞が見つかったので、最後にレントゲン科へ回され診断を受けました。検査結果はコバルトをかけるべきかどうか微妙なところで、レントゲン科の部長先生、ドクター・ペイン、私の間で話し合いが持たれました。最後はドクターが「執刀医の“勘”としては、この際副作用のあるものは何もしない方がよいように思う。それに放射線は日本でもできるので、帰って日医大の先生ともご相談なさったらいかがですか」とおっしゃいました。結局、日医大の先生方も執刀医の“勘”を尊重しようということで、私も納得し、コバルトも抗ガン剤もやりませんでした。薬の使用を慎重に考え、人間が本来持っている回復力をまず引き出すことの重要性を、身をもって学びました。

これまでのお話では、少し厳しい側面を強調しすぎてしまったかも知れません。スパルタ式特訓の毎日だったと印象を持たれた方もあるかと思います。確かに、これをやりなさいというドクターの指示に対しては、話し合って折り合いをつけて行く、といったようなことはありませんでした。そのときどきに、私自身は満点しか許されないのだ、と全力をあげざるを得ません。でも、こうすることによって一つ一つをクリアで



たなか・みちこ

1934年、東京生まれ。東洋英和女学院より、アメリカ・イリノイ州ノックス大学へ留学し、57年、同大卒業。主婦。

きたことが、次の問題にとりかかる時の自信につながりました。あの厳しさが、私の甘えを切り捨て、早い回復につながったのです。

とりあえず、直接的な治療方針、あるいは病院の姿勢という面でのお話を先にしましたが、こうした面をフォローするさまざまなことにも、私はとても深い印象を持っています。最も大きなことといえば、医師団と早い時期から信頼関係が樹立されたこと、そしてナースをはじめ、看護にあたって下さった方々の行き届いたきめ細やかなケアがあったことです。

### 対話:何でもいいから言って欲しい

少し具体的にお話してみたいと思います。医師団との交流は毎朝7時にアシスタント・ドクターがいらっしやることから始まります。その日の様子を聞かれ、8時頃にはドクター・ペインがいらっしやって、私の手を握り、「さあこの24時間のことを話して下さい」とおっしゃるので。最初の日、私は何を言ってもいいのかわからず黙っていると、ドクターは困ったように言われました。「何でもいいから言って欲しいのです。こちらの考えだけで動きたくありませんから。個人個人で違うことがたくさんあるのです。英語を話すのは大変かもしれないけれど、頑張ってください」と。「何でもいいから言って欲しいのです」。この一言で心を開かれました。何でも聞いていただける、そう思ったのです。医療の側からすると、切った、はった、薬を出した、回復したで終わるのかもしれませんが、患者にとっては医師との“やりとり”が入院中のことだけでなく、その後の人生にかかわることにもなるのです。それから退院



外来診察室



メソジストホスピタルの患者

までの30日間、土日以外のほとんど毎朝、10分から15分くらい、私はドクター・ペインとの対話の時間をもちました。時には、病気の話だけでなく、私の家族のことや、着ているパジャマの色のことなどさまざまで、心が和むひとときでもありました。病気のことに關しては、どんな質問にも納得いくまで説明して下さったので、不安定になりがちな患者にとっては何よりの安定剤の効果があつたのではないかと思います。このドクター・ペインとの会話を通じて、私はメイヨーの医療の底流をなすものは、“個”を大切にすることだと分かりました。食道ガンの患者は“みな同じ”というのではなく、私という個人をしっかり見つけ抱きとめて下さったのです。

## 信頼関係とインフォームド・コンセント

医師と患者の間に結ばれる信頼関係を、医師がいかに重視しているかということは、メインの手術の後、2回の縫合手術を追加して行わなければならないときの対応にもよく示されました。私のところにいらしたドクター・ペインは、「私たちの力及ばず、申し訳ありませんでした。一度で済ませるべく全力を尽くしたのですが、首の左右両側にリークが見つかったのです。胸骨の後ろで縫合する難しい手術とはいえ、残念です」と深々と頭を下げられたのです。まさか3週間のうちに3回も手術を受けるとは夢にも思っておりませんでしたから、最後の手術の前にはかなり落ち込みました。しかしこの時にも医師団に対する信頼は全く揺るがなかったのです。医師自らが、その時その時の状況をきちんとお話し下さいます。事前にどのような治療が施されるかを説明されることによって、患者である私も自分なりに、どういう状況にあるのか、どういう処置が行われていくのかを理解して、精神的なゆとりというべきものがもたらされたと思っています。

現在日本で盛んに言われているインフォームド・コンセントは、何か「病名の告知」のみを意味するようなトーンがありますが、実は病気の進行状況、治療や看護の経過や内容、あるいは将来の見通しなど全てを患者に説明することをいうのだと、実感しました。

また、メイヨーでの手術前の検査結果や、3回にわたる手術とその直後の様子は、その日のうちにドクター・ペインから日本医科大学付属病院に報告され、そのコピーが私の枕もとに届けられていたこともご紹介しておきたいことのひとつです。

話はちょっとそれますが、先生方にお会いできる楽しみの一つに毎朝のドレスアップがありました。英国紳士のドクター・ペインは背広だけでなく、ワイシャツ、ネクタイ、カフスボタンを毎日のように替えていらっしゃいました。フランス人形を思わ

せるアシスタント女医ドクターは、取っかえ引っかえ素敵なスーツ姿で現れました。外界を感じることのできるものは何でもとても嬉しかったのです。また先生方が大変身近に感じられ、朝一番明るい気持ちになったことを憶えています。

## 明るく元気なナースたち

さて、私が感じたきめ細かなケアとはどのようなものであつたか、もう少し詳しくお話してみたいと思います。まずはナースのことですが、私が一番驚いたのは、大勢の方々が入れ替わり立ち替わり看護にあたつたということです。朝8時から夕方4時まで、4時から夜12時まで、12時から朝8時までと三交代のローテーションが組まれているのですが、一週間に一度の人、二～三度の人、あるいは夜だけのパートの人などさまざまです。男性のナースのお世話にもなりました。こうして考えてみますと、30日間に私がお世話になったナースは、一度しか会っていない人も含めると大変な数になりそうです。定期的にお世話になった方々でも、四～五人になります。ところが、そうした入れ替わり立ち替わりの体制のなかでも、不自由さや不快感、不安を覚えたことはありませんでした。メイヨーは、ベッド数2000の大きな病院ですが、このしっかりとしたひとつの大きな流れは、何によってもたらされているのか、いま考えても不思議なところではあります。

メイヨーの病室は、ナース・ステーションを中心に、放射状に配置されています。私のように家族の付添いがいない場合には、静まりかえっていない方がいいだろうと配慮され、たいていドアが開けられたままになっていたのですが、このナース・ステーションがいつも明るい雰囲気、ジョークが飛び交うのか、笑い声が絶えませんでした。彼女たちの明るさと元気さは、頼もしくもありました。私は手術直後から、病院の担当ナースのみの看護で付添いは誰もつきませんでした。助けが必要なとき、ベルを押すとナースが飛んで来てくれましたし、担当ナースが他の患者についているときにはヘッド・ナースが来てくれましたので、何の不自由もありませんでした。夜中でも睡眠剤などを求めると、10分も待たずに薬が届きました。私の場合、勿論飲み薬はすべて液体状で必要だったにもかかわらず……です。薬剤師が病棟に常駐しているそうです。

リハビリで廊下を歩いていると、担当でないナースの方々も必ず声をかけて下さいました。「昨日より顔色がいいわよ」とか、「ずいぶん速く歩けるようになりましたね」など。自分では回復度がつかめない場合もあり、そんな時には落ち込むわけですから、この励ましの一言は本当に嬉しかったのです。(次号に続く)